

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	授業番号	DA100003
旧約聖書文学特殊研究 a	田中 光	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> 詩編の解釈		
<到達目標> 詩編の言葉を原典や諸翻訳（古代語訳含む）によって丁寧に読み、その神学的メッセージを理解すること。ドクター学生は特に、原典読解の精度を高め、また様々な外国語の二次文献における学問的議論に通暁することが目標である。		
<授業の概要> 各詩編を次のようなプロセスで読解していく。①詩編のヘブライ語原典の内容を精読し、本文批評的問題を BHS のアパラタスその他によって確認する。②注解書その他によりながら、詩編の種類、歴史的背景、解釈の歴史、神学的メッセージなどについて討論する。		
<履修条件> ヒブル語の講義を受講して基礎文法を習得していることが望ましい。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション&イントロダクション 第2回 詩編概説 第3回 詩編 19 編①: ヒブル語テキストの講読（前半） 第4回 詩編 19 編② ヒブル語テキストの講読（後半）＋本文批評的考察 第5回 詩編 19 編③ 解釈に関するディスカッション 第6回 詩編 20 編① ヒブル語テキストの講読（前半） 第7回 詩編 20 編② ヒブル語テキストの講読（後半）＋本文批評的考察 第8回 詩編 20 編③ 解釈に関するディスカッション 第9回 詩編 21 編① ヒブル語テキストの講読（前半） 第10回 詩編 21 編② ヒブル語テキストの講読（後半）＋本文批評的考察 第11回 詩編 21 編③ 解釈に関するディスカッション 第12回 詩編 22 編① ヒブル語テキストの講読（前半） 第13回 詩編 22 編② ヒブル語テキストの講読（後半）＋本文批評的考察 第14回 詩編 22 編③ 解釈に関するディスカッション 第15回 まとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 事前に指示された予習（ヒブル語テキストの読解や参考書の読解）をきちんと行って授業にのぞむこと。特に、ドクターの学生は、事前にヒブル語原典の文法的特徴をより深く理解し、ディスカッションのために様々な外国語の注解書を積極的に読んで準備してることが求められる。		
<テキスト> 特に定めない。		
<参考書・参考資料等> 初回授業にて指示する。ドクターの学生は、初回で配布する文献表の中から、必ず1-2冊の外国語の注解書入手（図書館で借りてもよい）しておくこと。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 各授業における予習・参加の度合いと、期末のペーパー（6000字程度）によって評価する。評価は「共通評価指標」（1）に基づいて行う。		
<課題に対するフィードバックの方法> 授業における質問・意見へのコメント、及び期末ペーパーへのコメントによってフィードバックする。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	授業番号	DA100004
旧約聖書文学特殊研究 b	田中 光	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> 終末論と黙示思想		
<到達目標> 旧約聖書や第二神殿時代の終末論的・黙示的諸文書を読んでそれらの神学的内容を把握し、かつ、それらが新約聖書に見られる終末論・黙示思想と深い関わりを持っていることを理解すること。特にドクターの学生は、一次文献だけでなく、二次文献などにも目を通して、より積極的にディスカッションに貢献し、自らの神学的理解を深めることが目標である。		
<授業の概要> まずは旧約聖書に見られる終末論から考察を開始し、その後、外典文書、そして死海文書へと考察を広げる。学生は、指示された一次資料をよく読み、場合によっては二次資料も参照して、授業におけるディスカッションに参加することが求められる。		
<履修条件> 特になし		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション&イントロダクション 第2回 終末論と黙示思想概説 第3回 イザヤ書: 概説とテキストに関するディスカッション (主に 24-27 章) 第4回 エゼキエル書: 概説とテキストに関するディスカッション (主に 40-47 章) 第5回 ゼカリヤ書: 概説とテキストに関するディスカッション (主に 9-14 章) 第6回 ダニエル書: 概説とテキストに関するディスカッション (主に 7 章 1-14 節; 12 章 1-4 節) 第7回 第一エノク書①: 概説とテキスト (前半) に関するディスカッション 第8回 第一エノク書②: テキスト (後半) に関するディスカッション 第9回 死海文書概説 第10回 共同体の規則に関する文書 (1QS 他) ①: 概説とテキスト (前半) に関するディスカッション 第11回 共同体の規則に関する文書 (1QS 他) ②: テキスト (後半) に関するディスカッション 第12回 ダマスコ文書 (CD 他) ①: 概説とテキスト (前半) に関するディスカッション 第13回 ダマスコ文書 (CD 他) ②: テキスト (後半) に関するディスカッション 第14回 戦い文書 (1QM 他) ①: 概説とテキスト (前半) に関するディスカッション 第15回 戦い文書 (1QM 他) ②: テキスト (後半) に関するディスカッション+授業全体のまとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分~240分を目安とする。 学生は次の授業で読み合わせる一次資料や二次資料を良く読んで、授業に参加すること。特にドクターの学生は、可能であれば一次文献の原典に目を通し、更には二次文献に関する議論も踏まえたうえで、ディスカッションに参加すること。		
<テキスト> 特に定めない。		
<参考書・参考資料等> 日本聖書学研究所編『聖書外典偽典 4 旧約偽典 II』教文館、2020年(オンデマンド版); 松田伊作・月本昭男・上村静訳『死海文書 I 共同体の規定・終末規定』ぷねうま舎、2020年; その他、初回授業にて紹介する。ドクターの学生は、可能であれば、死海文書の原典と翻訳が掲載された以下の書物にも目を通しておくこと。F. G. Martinez and E. J. C. Tigchelaar, <i>The Dead Sea Scrolls Study Edition</i> , vol. 1-2 (Leiden: Brill/Grand Rapids: Eerdmans, 1997-1998 [paperback edition, 2000]).		
<学生に対する評価(方法・基準)> 授業におけるディスカッションと期末のレポート(6000字程度)によって評価する。		
<課題に対するフィードバックの方法> ディスカッションで出た質問・意見に対するコメント、そして期末レポートへのコメントによってフィードバックする。評価は「共通評価指標」(1)に基づいて行う。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	授業番号	DA100007
聖書語学特殊研究 a	佐藤 泉	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> 聖書の古代訳の一つにペシッタ（シリア語訳）がある。ペシッタを読むためのシリア語文法の基礎を学ぶ。さらに聖書の原典と古代訳との比較を行なう。		
<到達目標> ①シリア語文法の基礎を身につける。②身につけたシリア語文法の基礎を生かし、辞書も用いながら、ペシッタを読むことができるようになる。③聖書の原典とペシッタや他の古代訳との比較を行なうことができるようになる。		
<授業の概要> 練習問題に取り組むながら、ペシッタを読むために必要なシリア語文法を学ぶ。聖書の原典と古代訳との比較に慣れていく。		
<履修条件> ヒブル語履修済みであること。		
<授業計画> 第1回：序 シリア語を学ぶ意義等を話し、子音について（1）ヤコブ派の書体を学ぶ。 第2回：子音について（2）ネストリウス派とエストラングラの書体を学ぶ。 第3回：母音について ヤコブ派とネストリウス派の母音記号を学ぶ。 第4回：代名詞について 人称・指示・疑問・関係代名詞を学ぶ。 第5回：前置詞について 基本的なものをいくつか学ぶ。 第6回：名詞について（1） 基本的な名詞について、ヘブライ語との比較をしつつ、その特徴を学ぶ。 第7回：代名詞語尾について ヘブライ語と同様にシリア語も名詞等に代名詞語尾がつくことを学ぶ。 第8回：名詞について（2） 母音の移動を伴うものを学ぶ。 第9回：名詞について（3） 不規則変化するものを学ぶ。 第10回：規則動詞について（1） Peal 形の変化、特に完了を学ぶ。 第11回：規則動詞について（2） Peal 形の変化、特に未完了・命令・分詞・不定詞を学ぶ。 第12回：規則動詞について（3） Ethpeel 形の変化を学ぶ。 第13回：規則動詞について（4） Pael 形と Ethpael 形の変化を学ぶ。 第14回：規則動詞について（5） Aphel 形と Ettaphal 形の変化を学ぶ。 第15回：規則動詞について（6） 代名詞語尾のついた形の変化を学ぶ。		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 授業中に指示のあった練習問題等について、できる範囲で準備すること。ヒブル語の文法も参照しておくこと。		
<テキスト> Theodore H. Robinson, Paradigms and Exercises in Syriac Grammar, 3 rd .ed., Oxford University Press, London, 1949. (教務課で各自購入する。)		
<参考書・参考資料等> William Jennings, Lexicon to the Syriac New Testament, Oxford at the Clarendon Press, 1926. Takamitsu Muraoka, Classical Syriac for Hebraists, Wiesbaden: O. Harrassowitz, 1987. Theodor Nöldeke, Compendious Syriac Grammar, Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns, 2001.		
<学生に対する評価（方法・基準）> 予習・復習、積極的な授業参加の状況、ペシッタのテキストの中から指定された箇所に関する発表によって成績をつける。評価にあたっては、「共通評価指標：講義・演習」の①～④の内容を重視する。		
<課題に対するフィードバックの方法> 練習問題等の発表後には授業の中で解説等をする。また、ペシッタのテキストに関する発表後にも授業の中で解説等をする。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	授業番号	DA100008
聖書語学特殊研究 b	佐藤 泉	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件> 通年で履修するのが望ましい。	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> 聖書の古代訳の一つにペシッタ（シリア語訳）がある。ペシッタを読むためのシリア語文法の基礎を学ぶ。さらに聖書の原典と古代訳との比較を行なう。		
<到達目標> ①シリア語文法の基礎を身につける。②身につけたシリア語文法の基礎を生かし、辞書も用いながら、ペシッタを読むことができるようになる。③聖書の原典とペシッタや他の古代訳との比較を行なうことができるようになる。		
<授業の概要> シリア語文法の学びを継続する。その後に講読に入るが、まず新約からマタイによる福音書の「山上の説教」、さらに旧約からエレミヤ書等をペシッタで読み、さらに聖書の原典や他の古代訳との比較を行なう（箇所は未定。授業中に指示する。）		
<履修条件> ヒブル語履修済みであること並びに聖書語学特殊研究 a（シリア語）履修済みであること。		
<授業計画> 第1回：不規則動詞について（1） Pe Nûn 動詞の変化を学ぶ。 第2回：不規則動詞について（2） Lamed 喉音動詞の変化を学ぶ。 第3回：不規則動詞について（3） Pe 'alep 動詞の変化を学ぶ。 第4回：不規則動詞について（4） Pe Yod 動詞の変化を学ぶ。 第5回：不規則動詞について（5） 二根字動詞の変化を学ぶ。 第6回：不規則動詞について（6） 二重' ayin 動詞の変化を学ぶ。 第7回：不規則動詞について（7） Lamed 'alep・Lamed Yod 動詞の変化を学ぶ。 第8回：「山上の説教」の講読（1） Jennings の辞書を引きながら、ペシッタを読むことに慣れる。 第9回：「山上の説教」の講読（2） 原典との比較をしつつ読むことを味わう。 第10回：「山上の説教」の講読（3） シリア語文法、特に不規則変化する名詞を確認しつつ読む。 第11回：「山上の説教」の講読（4） シリア語文法、特に動詞の変化を確認しつつ読む。 第12回：「山上の説教」の講読（5） シリア語が解釈に影響を与えている一例について話す。 第13回：エレミヤ書等の講読（1） ネストリウス派の書体・母音記号で読むことに慣れる。 第14回：エレミヤ書等の講読（2） シリア語文法を全体的に思い出しつつ読む。 第15回：エレミヤ書等の講読（3） 原典や七十人訳と比較しつつ読むことを味わう。		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 授業中に指示のあった練習問題等について、できる範囲で準備すること。ヒブル語の文法も参照しておくこと。ペシッタの講読に関しては、原典にも目を通しておくこと。		
<テキスト> Theodore H. Robinson, Paradigms and Exercises in Syriac Grammar, 3 rd .ed., Oxford University Press, London, 1949.（教務課で各自購入する。）		
<参考書・参考資料等> William Jennings, Lexicon to the Syriac New Testament, Oxford at the Clarendon Press, 1926. ; Takamitsu Muraoka, Classical Syriac for Hebraists, Wiesbaden : O. Harrassowitz, 1987. ; Theodor Nöldeke, Compendious Syriac Grammar, Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns, 2001. ; J. Payne Smith, A compendious Syriac dictionary : founded upon the Thesaurus Syriacus of R. Payne Smith, Winona Lake, Ind. : Eisenbrauns, 1998. ; 左近義慈編著、本間敏雄改訂増補『ヒブル語入門』[改訂増補版] 教文館、2011 ; William L. Holladay, A Concise Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament, Grand Rapids, 1971 ; Gustaf Dalman, Grammatik des jüdisch-palästinischen Aramäisch, Darmstadt : Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1960 ; Gustaf Dalman, Aramäisch-Neuhebräisches Handwörterbuch, Göttingen : E. Pfeiffer, 1938 ; Marcus Jastrow, A dictionary of Targumim, the Talmud Babli and Yerushalmi, and the Midrashic literature v1, v2, New York: Pardes, 1950		
<学生に対する評価（方法・基準）> 予習・復習、積極的な授業参加の状況、ペシッタのテキストの中から指定された箇所に関する発表によって成績をつける。評価にあたっては、「共通評価指標：講義・演習」の①～④の内容を重視する。		
<課題に対するフィードバックの方法> 練習問題等の発表後には授業の中で解説等をする。また、ペシッタのテキストに関する発表後にも授業の中で解説等をする。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		授業番号 DA200001
新約聖書神学特殊研究 a	河野 克也	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> パウロの思想を多様な第二神殿ユダヤ教の中に位置づけ、立体的に理解する。		
<到達目標> パウロの思想を理解する背景として、第二神殿ユダヤ教（初期ユダヤ教）について全体像を把握することを目指す。特に各回に扱う内容について、概要だけでなく議論が分かれる点についても深く理解することを目指す。		
<授業の概要> John J. Collins and Daniel C. Harlow (eds.), <i>Early Judaism: A Comprehensive Overview</i> (Grand Rapids: Eerdmans, 2012) の各章を通して、第二神殿ユダヤ教の概要を学ぶ。		
<履修条件> 特になし		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション、第1章「現代の研究史における初期ユダヤ教」 第2回 第2章「アレクサンドロスからハドリアヌスまでのユダヤ史」 第3回 第3章「イスラエルの地におけるユダヤ教」 第4回 第4章「ディアスポラにおけるユダヤ教」 第5回 第5章「ユダヤ聖典：テキスト、版、正典」 第6回 第6章「初期ユダヤ教の聖書解釈」 第7回 第7章「外典および偽典」 第8回 第8章「死海写本」 第9回 第9章「ギリシア語で書かれた初期ユダヤ教文献」 第10回 第10章「フィロン」 第11回 第11章「ヨセフス」 第12回 第12章「考古学、パピルス、および碑文」 第13回 第13章「ギリシア人およびローマ人のただ中のユダヤ人」 第14回 第14章「初期ユダヤ教と初期キリスト教」 第15回 第15章「初期ユダヤ教とラビ・ユダヤ教」、まとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 各自、事前に日本語私訳で各章を読み、ディスカッションに参加できるように準備すること。英語原書にも目を通しておくこと。		
<テキスト> John J. Collins and Daniel C. Harlow (eds.), <i>Early Judaism: A Comprehensive Overview</i> (Grand Rapids: Eerdmans, 2012). 学生各自で用意すること。日本語は河野私訳を提供する。		
<参考書・参考資料等> 授業において、必要に応じて指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 出席が2/3に足りない場合は、成績評価の対象外とする。授業への積極的な参加と期末レポートにより評価する。レポートは6,000字以上とする。評価にあたっては、共通評価指標(1)に基づいて評価する。		
<課題に対するフィードバックの方法> コメントを付して返却する。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	授業番号	DA200002
新約聖書神学特殊研究 b	河野 克也	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> パウロの思想を多様な第二神殿ユダヤ教の中に位置づけ、立体的に理解する。		
<到達目標> パウロ研究の「新しい視点」の意義について、第二神殿ユダヤ教（初期ユダヤ教）の背景から理解するとともに、「新しい視点」への批判についても理解を深めることを目指す。特に「新しい視点」への批判について、その根拠や論旨展開、結論などを批判的に分析することを目指す。		
<授業の概要> 「新しい視点」の嚆矢となったE・P・サンダース『パウロとパレスチナ・ユダヤ教』におけるパレスチナ・ユダヤ教の定義「契約遵法主義」と、それに対するさまざまな批判・反論を検討する。特に、Scot McKnight and B. J. Oropeza (eds.), <i>Perspectives on Paul: Five Views</i> (Grand Rapids: Baker, 2020) を題材に、競合する5つの「視点」の議論を批判的に検討する。		
<履修条件> 特になし		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション：Perspectives on Paul, “Paul in Perspective” (pp. 1-23). 第2回 サンダース以前の状況：K・ステンダールとE・ケーゼマンの論争 第3回 サンダース『パウロとパレスチナ・ユダヤ教』の意義 第4回 サンダースへの批判：「諸ユダヤ教」、「ラディカルな視点」、「功績神学」 第5回 第1章「ローマ・カトリックの視点」(pp. 25-55) 第6回 第1章「ローマ・カトリックの視点」への応答と再応答 (pp. 56-82) 第7回 第2章「伝統的プロテスタントの視点」(pp. 83-106) 第8回 第2章「伝統的プロテスタントの視点」への応答と再応答 (pp. 107-32) 第9回 第3章「新しい視点」(pp. 133-45) 第10回 第3章「新しい視点」への応答と再応答 (pp. 146-70) 第11回 第4章「ユダヤ教内のパウロの視点」(pp. 171-93) 第12回 第4章「ユダヤ教内のパウロの視点」への応答と再応答 (pp. 194-218) 第13回 第5章「恵みの視点」(pp. 219-36) 第14回 第5章「恵みの視点」への応答と再応答 (pp. 237-58) 第15回 あとがき (pp. 259-66)、まとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 各回の課題図書を事前に読み、ディスカッションに参加できるように準備すること。特に各視点に対する応答と再応答の部分について、自分なりの評価をしておくこと。		
<テキスト> Scot McKnight and B. J. Oropeza (eds.), <i>Perspectives on Paul: Five Views</i> (Grand Rapids: Baker, 2020). 学生各自が用意する。		
<参考書・参考資料等> 山口希生『ユダヤ人も異邦人もなく：パウロ研究の新潮流』（新教出版社、2023年）。その他、授業において、必要に応じて指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 出席が2/3に足りない場合は、成績評価の対象外とする。授業への積極的な参加と期末レポートにより評価する。レポートは6,000字以上とする。評価にあたっては、共通評価指標(1)に基づいて評価する。		
<課題に対するフィードバックの方法> コメントを付して返却する。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	授業番号	DA200003
新約聖書原典特殊研究 a	遠藤 勝信	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件> 通年 (a, b)の登録が望ましい。	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> ヨハネによる福音書3：31～4：38の原典釈義。ギリシア語新約聖書のテキストを歴史的、文学的、神学的文脈に基づいて解釈する方法を学ぶ。		
<到達目標> 学生が、テキストと真摯に向き合う姿勢を学びつつ、聖書釈義の方法を修得する。		
<授業の概要> はじめに近年のヨハネ福音書研究の動向(研究史、方法論)を概観し、釈義上の問題及び観点を確認する。その後、参加者による発表とディスカッション。釈義の正確さと共に慎重な議論の仕方、神学的掘り下げについて学び合う。		
<履修条件> 新約ギリシア語原典テキスト読解力を有すること。ギリシア語中級文法の知識があることが望ましい。		
<授業計画>		
I. 講義を中心に		
第01回 研究史を概観し、近年の研究状況と釈義の諸問題を学ぶ。		
第02回 ギリシア語新約聖書本文批評の実際。		
第03回 テキストの文学批評の実際。		
第04回 テキストと歴史批評の実際。		
第05回 ヨハネ1～3章の概要		
II. 演習(参加者による釈義の発表とディスカッション)を中心に		
第06回 ヨハネ03：31～36の原典釈義(その1：文法と文脈)		
第07回 ヨハネ03：31～36の原典釈義(その2：釈義と解釈)		
第08回 ヨハネ04：01～10の原典釈義(その1：文法と文脈)		
第09回 ヨハネ04：01～10の原典釈義(その2：釈義と解釈)		
第10回 ヨハネ04：11～19の原典釈義(その1：文法と文脈)		
第11回 ヨハネ04：11～19の原典釈義(その2：釈義と解釈)		
第12回 ヨハネ04：20～30の原典釈義(その1：文法と文脈)		
第13回 ヨハネ04：20～30の原典釈義(その2：釈義と解釈)		
第14回 ヨハネ04：31～38の原典釈義(その1：文法と文脈)		
第15回 ヨハネ04：31～38の原典釈義(その2：釈義と解釈)		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。クラスで取り上げる新約聖書テキストをギリシア語文法に則して読み、釈義的問題点を明確にしてクラスに出席すること。		
<テキスト> Nestle-Aland (28 th ed., 2012), <i>Novum Testamentum Graece</i> 各自で購入のこと。		
<参考書・参考資料等> R・ブルトマン著、杉原助訳『ヨハネの福音書』、2005年 R・A・カルペッパー著、伊東寿泰訳『ヨハネ福音書文学的解剖』2005年 R・ボウカム、浅野淳博訳『イエスとその目撃者たち』2011年 C.S. Keener, <i>The Gospel of John- A Commentary vol.1</i> , 2003. J. Ramsey Michaels, <i>The Gospel of John</i> , 2010.		
<学生に対する評価(方法・基準)> 授業における発表と期末試験(指定されたテキストについての釈義ペーパー [8,000～10,000文字])。釈義ペーパーに、新約聖書学の基礎的理解及びテキストへの真摯な取り組みが反映されているかを評価。尚、出席が三分の二を満たさない場合、期末試験の受験を許可しない。レポートは共通評価指標：講義・演習によって評価する。		
<課題に対するフィードバックの方法> 学生には釈義の発表を求め、教員はそれに対し批評とともにアドバイスを与える。学生はそのアドバイスに基づいて釈義を見直し、最終的に釈義レポートを完成させることを通して学習のフィードバックを行う。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	授業番号	DA200004
新約聖書原典特殊研究 b	遠藤 勝信	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件> 通年 (a, b)の登録が望ましい。	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> ヨハネの黙示録12:13~14:13までの原典釈義。ギリシア語新約聖書のテキストを歴史的、文学的、神学的文脈に基づいて解釈する方法を学ぶ。		
<到達目標> 学生が、テキストと真摯に向き合う姿勢を学びつつ、聖書釈義の方法を修得する。		
<授業の概要> はじめに近年のヨハネ福音書研究の動向(研究史、方法論)を概観し、釈義上の問題及び観点を確認する。その後、参加者による発表とディスカッション。釈義の正確さと共に慎重な議論の仕方、神学的掘り下げについて学び合う。		
<履修条件> 新約ギリシア語原典テキスト読解力を有すること。ギリシア語中級文法の知識があることが望ましい。		
<授業計画>		
I. 講義を中心に		
第01回 イントロダクション。黙示録の文学ジャンル。		
第02回 黙示録を読む前に(その1): 黙示録の周辺、背景理解。		
第03回 黙示録を読む前に(その2): 構造と構成、神学。		
第04回 黙示録を読む前に(その3): 他。		
第05回 黙示録1章~12章12節までを概観し、釈義の営みにおける課題と観点を確認する。		
II. 演習(参加者による発表とディスカッション)を中心に		
第06回 黙示録12:13~18の原典釈義(その1: 文法と文脈)		
第07回 黙示録12:13~18の原典釈義(その2: 釈義と解釈)		
第08回 黙示録13:01~10の原典釈義(その1: 文法と文脈)		
第09回 黙示録13:01~10の原典釈義(その2: 釈義と解釈)		
第10回 黙示録13:11~18の原典釈義(その1: 文法と文脈)		
第11回 黙示録13:11~18の原典釈義(その2: 釈義と解釈)		
第12回 黙示録14:01~07の原典釈義(その1: 文法と文脈)		
第13回 黙示録14:01~07の原典釈義(その2: 釈義と解釈)		
第14回 黙示録14:08~13の原典釈義(その1: 文法と文脈)		
第15回 黙示録14:08~13の原典釈義(その2: 釈義と解釈)		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分~240分を目安とする。 クラスで取り上げる新約聖書テキストをギリシア語文法に則して読み、釈義的問題点を明確にしてクラスに出席すること。		
<テキスト> Nestle-Aland (28 th ed., 2012), <i>Novum Testamentum Graece</i> 各自で購入のこと。		
<参考書・参考資料等> 佐竹明著『ヨハネの黙示録』(上・下巻)2009年 R・ボウカム著、飯郷友康・小河陽訳『ヨハネ黙示録の神学』2001年 R. Bauckham, <i>The Climax of Prophecy</i> , 1993. G. Beale, <i>The Book of Revelation</i> (NIGTC), 1999. D. Aune, <i>Revelation 6-16</i> (WBC), 1997. G. R. Osborne, <i>Revelation</i> , 2002.		
<学生に対する評価(方法・基準)> 授業における発表と期末試験(指定されたテキストについての釈義ペーパー [8,000~10,000文字])。釈義ペーパーに、新約聖書学の基礎的理解及びテキストへの真摯な取り組みが反映されているかを評価。尚、出席が三分の二を満たさない場合、期末試験の受験を許可しない。レポートは共通評価指標: 講義・演習によって評価する。		
<課題に対するフィードバックの方法> 学生には釈義の発表を求め、教員はそれに対し批評とともにアドバイスを与える。学生はそのアドバイスに基づいて釈義を見直し、最終的に釈義レポートを完成させることを通して学習のフィードバックを行う。		

組織神学専攻・組織神学関係	授業番号	DB100001
教義学特殊研究 a	須田 拓	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件> 学期毎の登録可	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> 終末論の諸相を学ぶことを通して、深い教義学の理解を持つことを目指す。		
<到達目標> 終末論について、現代神学にどのような議論があるのかを知り、自分の研究テーマと関連させつつ、自らこの問題について深く考えることができるようになる。		
<授業の概要> 終末論について講義を中心としつつ、博士後期課程の履修者による発表と意見表明を交えて進めてゆく。論点を整理した上で、現代の様々な神学者の議論を概観し、あるべき終末論の姿を模索する。		
<履修条件> 特になし		
<p><授業計画></p> <p>第1回 オリエンテーション</p> <p>第2回 終末論の論点(1) 個人的終末論と社会的終末論</p> <p>第3回 終末論の論点(2) 現在の終末論と将来的終末論</p> <p>第4回 終末論の論点(3) 時間と永遠</p> <p>第5回 個人的終末論と社会的終末論(1) ユルゲン・モルトマンの場合</p> <p>第6回 個人的終末論と社会的終末論(2) ヴォルフハルト・パネンベルクの場合</p> <p>第7回 個人的終末論と社会的終末論(3) ロバート・ジェンソンの場合</p> <p>第8回 中間総括</p> <p>第9回 現在の終末論と将来的終末論(1) ユルゲン・モルトマンの場合</p> <p>第10回 現在の終末論と将来的終末論(2) ヴォルフハルト・パネンベルクの場合</p> <p>第11回 現在の終末論と将来的終末論(3) ロバート・ジェンソンの場合</p> <p>第12回 時間と永遠(1) カール・バルトの場合</p> <p>第13回 時間と永遠(2) ヴォルフハルト・パネンベルクの場合</p> <p>第14回 時間と永遠(3) ユルゲン・モルトマンの場合</p> <p>第15回 まとめ</p>		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 毎回、授業で扱う人物の著作を事前に読み、講義の最後にそれに対する意見を述べられるようにしておく。		
<テキスト> 特になし		
<参考書・参考資料等> 授業において、必要に応じて指示する。		
<学生に対する評価(方法・基準)> 授業における発表と意見表明、期末のレポート(6,000字程度)によって評価する。評価にあたっては、共通評価指標に基づいて評価する。		
<課題に対するフィードバックの方法> 個別の求めに応じてコメント、指導する。		

組織神学専攻・組織神学関係	授業番号	DB100002
教義学特殊研究 b	須田 拓	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件> 学期毎の登録可	
<p><学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する</p>		
<p><授業のテーマ> 贖罪論の諸相を学ぶことを通して、深い教義学の理解を持つことを目指す。</p>		
<p><到達目標> 贖罪論について、歴史的に、また現代神学にどのような議論があるのかを知り、自分の研究テーマと関連させつつ、自らこの問題について深く考えることができるようになる。</p>		
<p><授業の概要> 贖罪論について講義を中心としつつ、博士後期課程の履修者による発表と意見表明を交えて進めてゆく。論点を整理した上で、宗教改革期やピューリタンの議論を概観し、現代の神学者たちの議論を踏まえつつ、あるべき贖罪論の姿を模索する。</p>		
<p><履修条件> 特になし</p>		
<p><授業計画></p> <p>第1回 オリエンテーション</p> <p>第2回 贖罪論の論点(1) 贖罪論の類型とその問題</p> <p>第3回 贖罪論の論点(2) 福音と贖罪、三位一体論的贖罪論</p> <p>第4回 古代における贖罪論 エイレナイオスとアウグスティヌスの場合</p> <p>第5回 宗教改革期の贖罪論(1) ルターの場合</p> <p>第6回 宗教改革期の贖罪論(2) カルヴァンの場合</p> <p>第7回 中間総括</p> <p>第8回 ピューリタンの贖罪論(1) アルミニウス主義とソツツィーニ主義の場合</p> <p>第9回 ピューリタンの贖罪論(2) 会衆派 (ジョン・オーウェン, トマス・グッドウィン) の場合</p> <p>第10回 ピューリタンの贖罪論(3) 長老派 (リチャード・バクスター) の場合</p> <p>第11回 現代の贖罪論(1) ジェームス・デニーとピーター・フォーサイスの場合</p> <p>第12回 現代の贖罪論(2) カール・バルトの場合</p> <p>第13回 現代の贖罪論(3) ヴォルフハルト・パネンベルクとユルゲン・モルトマンの場合</p> <p>第14回 現代の贖罪論(4) トマス・トーランスの場合、その他</p> <p>第15回 まとめ</p>		
<p><準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 毎回、授業で扱う人物の著作を事前に読み、講義の最後にそれに対する意見を述べられるようにしておく。</p>		
<p><テキスト> 特になし</p>		
<p><参考書・参考資料等> 授業において、必要に応じて指示する。</p>		
<p><学生に対する評価(方法・基準)> 授業における発表と意見表明、期末のレポート(6,000字程度)によって評価する。評価にあたっては、共通評価指標に基づいて評価する。</p>		
<p><課題に対するフィードバックの方法> 個別の求めに応じてコメント、指導する。</p>		

組織神学専攻・組織神学関係	授業番号	DB10007
組織神学特殊研究 a 現代哲学特殊研究 a	神代 真砂実	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件> 特になし。	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> 組織神学の代表的文献であるカール・バルトの『教会教義学』を学ぶことで、バルトの神学思想について深い理解を得、自分なりの評価を下せるようにする。		
<到達目標> ①バルトの神学的思惟の特徴を理解する。②バルトを通して、キリスト論（人性・職能・状態の問題）についての総合的な理解を身に着ける。③当該主題についてのバルト神学の貢献と問題点を理解し、自分なりの評価をレポートのかたちで説得力をもって表明できるようにする。		
<授業の概要> バルトの『教会教義学』から和解論（第二部）のキリスト論にあたる「人の子の高挙」（64節）の後半を学ぶ。テキストを精読し、その内容についての議論を重ね、また、適宜、解説を加えることで理解を深める。		
<履修条件> 前期課程との合同（並行）授業のため、後期課程の履修者は前期課程の学生よりも常に少なくとも一歩から二歩先んじた準備が期待されている。また、議論をリードする役割も求められる。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 テキスト、3～11頁（64節 3. 王的人間①） 第3回 同、11～24頁（同②） 第4回 同、24～32頁（同③） 第5回 同、33～48頁（同④） 第6回 同、48～69頁（同⑤） 第7回 同、70～85頁（同⑥） 第8回 同、85～98頁（同⑦） 第9回 同、98～118頁（同⑧） 第10回 同、118～138頁（同⑨） 第11回 同、138～149頁（同⑩） 第12回 同、149～165頁（同⑪） 第13回 同、165～182頁（同⑫） 第14回 同、183～194頁（同⑬） 第15回 まとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 演習なので、必ずテキストをよく読んでから出席することはもちろんであるが、さらに、テキストの内容に関連する事柄について自分から積極的にリサーチし、考察し、問題点を整理しておくこと。		
<テキスト> カール・バルト、『教会教義学・和解論Ⅱ／2 主としての僕イエス・キリスト 上〈2〉』、井上良雄訳（新教出版社、オンデマンド）。		
<参考書・参考資料等> 授業の中で適宜、紹介するが、Geoffrey W. Bromiley, <i>An Introduction to the Theology of Karl Barth</i> 中の当該箇所についての記述には必ず目を通しておくこと。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業への参加度（議論におけるリーダーシップを含む）、小課題、および期末のレポート（本文6,000字以上）による。共通評価指標に準拠して評価を与える。		
<課題に対するフィードバックの方法> 提出された課題について、個別の求めに応じて講評・指導する。		

組織神学専攻・組織神学関係		授業番号 DB100008
組織神学特殊研究 b 現代哲学特殊研究 b	神代 真砂実	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件> 特になし。	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> 前期と同じ。		
<到達目標> 前期と同じ。		
<授業の概要> 前期と同じ。		
<履修条件> 前期と同じ。		
<p><授業計画></p> <p>第1回 オリエンテーション、およびテキスト、195～211頁（64節 4. 御子の訓令①） 第2回 テキスト、212～224頁（同②） 第3回 同、224～238頁（同③） 第4回 同、239～253頁（同④） 第5回 同、253～263頁（同⑤） 第6回 同、263～279頁（同⑥） 第7回 同、279～294頁（同⑦） 第8回 同、294～313頁（同⑧） 第9回 同、313～329頁（同⑨） 第10回 同、329～341頁（同⑩） 第11回 同、341～351頁（同⑪） 第12回 同、351～362頁（同⑫） 第13回 同、363～375頁（同⑬） 第14回 同、375～393頁（同⑭） 第15回 まとめ</p>		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 前期と同じ。		
<テキスト> 前期と同じ。		
<参考書・参考資料等> 前期と同じ。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 前期と同じ。		
<課題に対するフィードバックの方法> 前期と同じ。		

組織神学専攻・組織神学関係	授業番号	DB100009
現代神学特殊研究 a	芳賀 力	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件> 博士課程後期に在籍する者	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> 公共的真理としての福音は、啓蒙主義以降の世俗化した近代社会にあって私的な事柄に成り下がっている。どうしたらもう一度福音の権威を取り戻すことができるのか、その方途を探る。		
<到達目標> 世俗化した文化の中にあっても、確信を持って福音的真理を宣べ伝えることのできる力を身に着ける。自分の博士論文のテーマと関連付けて、神学的認識を深めることができる。		
<授業の概要> 分担してテキストの要約を発表し、提示されたコメントを手がかりに全員で議論する。博士課程後期の学生は、議論の全体をリードするよう、心がけてほしい。		
<履修条件> 組織神学専攻以外の人も履修することができる。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 L.Newbigin『ギリシヤ人には愚かなれど』 第1章 第3回 同上 第2章 第4回 同上 第3章 第5回 同上 第4章 第6回 同上 第5章 第7回 同上 第6章 第8回 L.Newbigin『宣教学入門』 第1章、第2章 第9回 同上 第3章 第10回 同上 第4章 第11回 同上 第5章、第6章 第12回 同上 第7章 第13回 同上 第8章 第14回 同上 第9章 第15回 同上 第10章		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 担当に当たっていない場合でも、前もって目を通しておくこと。		
<テキスト> L.Newbigin『ギリシヤ人には愚かなれど』新教出版社、2007年。同『宣教学入門』日本基督教団出版局、2010年。 教員が用意する。		
<参考書・参考資料等> 必要に応じて授業内で指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 学期末にレポートを提出する。共通評価指標：講義・演習のうち、特に②と④に基づいて評価する。博士課程後期の学生として、将来の博士論文作成に資するように、その関連を吟味する。		
<課題に対するフィードバックの方法> 発表については授業中にコメントする。レポートについては、個別の求めに応じてコメントし、指導する。		

組織神学専攻・組織神学関係		授業番号 DB100010																																													
現代神学特殊研究 b	芳賀 力	<担当形態> 単独																																													
後期・2単位	<登録条件> 博士課程後期に在籍する者																																														
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する																																															
<授業のテーマ> ポスト・キリスト教時代にあつて、キリスト者は「寄留の他国人」であるが、そのような中で、公共の真理としての福音を物語る聖書の民の使命と課題について考える。																																															
<到達目標> 非キリス教的な文化の中にあつても、確信を持って福音的真理を宣べ伝えることのできる力を身に着ける。自分の博士論文のテーマと関連付けて、神学的認識を深めることができる。																																															
<授業の概要> 分担してテキストの要約を発表し、提示されたコメントを手がかりに全員で議論する。博士課程後期の学生は、議論の全体をリードするよう、心がけてほしい。																																															
<履修条件> 組織神学専攻以外の人も履修することができる。																																															
<授業計画> <table border="0"> <tr> <td>第1回</td> <td>S.Hauerwas 『平和を可能にする神の国』</td> <td>第1章</td> </tr> <tr> <td>第2回</td> <td>同上</td> <td>第2章</td> </tr> <tr> <td>第3回</td> <td>同上</td> <td>第3章</td> </tr> <tr> <td>第4回</td> <td>同上</td> <td>第4章</td> </tr> <tr> <td>第5回</td> <td>同上</td> <td>第5章</td> </tr> <tr> <td>第6回</td> <td>同上</td> <td>第6章</td> </tr> <tr> <td>第7回</td> <td>同上</td> <td>第7章</td> </tr> <tr> <td>第8回</td> <td>同上</td> <td>第8章</td> </tr> <tr> <td>第9回</td> <td>S.Hauerwas/W.H.Willimon 『旅する神の民』</td> <td>第1章</td> </tr> <tr> <td>第10回</td> <td>同上</td> <td>第2章</td> </tr> <tr> <td>第11回</td> <td>同上</td> <td>第3章</td> </tr> <tr> <td>第12回</td> <td>同上</td> <td>第4章</td> </tr> <tr> <td>第13回</td> <td>同上</td> <td>第5章</td> </tr> <tr> <td>第14回</td> <td>同上</td> <td>第6章</td> </tr> <tr> <td>第15回</td> <td>同上</td> <td>第7章</td> </tr> </table>			第1回	S.Hauerwas 『平和を可能にする神の国』	第1章	第2回	同上	第2章	第3回	同上	第3章	第4回	同上	第4章	第5回	同上	第5章	第6回	同上	第6章	第7回	同上	第7章	第8回	同上	第8章	第9回	S.Hauerwas/W.H.Willimon 『旅する神の民』	第1章	第10回	同上	第2章	第11回	同上	第3章	第12回	同上	第4章	第13回	同上	第5章	第14回	同上	第6章	第15回	同上	第7章
第1回	S.Hauerwas 『平和を可能にする神の国』	第1章																																													
第2回	同上	第2章																																													
第3回	同上	第3章																																													
第4回	同上	第4章																																													
第5回	同上	第5章																																													
第6回	同上	第6章																																													
第7回	同上	第7章																																													
第8回	同上	第8章																																													
第9回	S.Hauerwas/W.H.Willimon 『旅する神の民』	第1章																																													
第10回	同上	第2章																																													
第11回	同上	第3章																																													
第12回	同上	第4章																																													
第13回	同上	第5章																																													
第14回	同上	第6章																																													
第15回	同上	第7章																																													
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。担当に当たっていない場合でも、前もって目を通しておくこと。																																															
<テキスト> S.Hauerwas 『平和を可能にする神の国』新教出版社、1992年。同『旅する神の民』教文館、1999年。教員が用意する。																																															
<参考書・参考資料等> 必要に応じて授業内で指示する。																																															
<学生に対する評価（方法・基準）> 学期末にレポートを提出する。共通評価指標：講義演習のうち、特に②と④に基づいて評価する。博士課程後期の学生として、将来の博士論文作成に資するように、その関連を吟味する。																																															
<課題に対するフィードバックの方法> 発表については授業中にコメントする。レポートについては、個別の求めに応じてコメントし、指導する。																																															

組織神学専攻・歴史神学関係	授業番号	DB200001
神学史特殊研究 a	本城 仰太	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	特になし
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> 信条と信仰告白の必須性（テキストの第二章）を学ぶ。		
<到達目標> 聖書や二千年にわたる信条・信仰告白に関して、「信じることと告白すること」、「信仰の定義」、「信仰を告白すること」、「信仰告白の内容」といった観点から整理し、論じることができるようになる。また、一次史料を原典で読み、二次史料によって最新研究を用いる力を養い、関連する教理を論じられるようになる。		
<授業の概要> 毎回のテーマに関連するレジュメと史料を配布しての講義、学生による発表（一人当たり2回）、ディスカッションを行う。		
<履修条件> 特になし		
<授業計画> 第1回 ガイダンス、テキストについて、信条と信仰告白の定義 第2回 「信条」と「信仰告白」という用語をめぐって 第3回 「信じることと告白すること」①（古代から中世） 第4回 「信じることと告白すること」②（中世から改革期） 第5回 「信じることと告白すること」③（改革期から近現代） 第6回 「信仰の定義」①（信仰の定義と信仰義認の教理の影響） 第7回 「信仰の定義」②（知識として、同意として、信頼としての信仰） 第8回 「信仰の定義」③（主観的信仰と客観的信仰の関係） 第9回 「信仰の定義」④（信じることの対象） 第10回 「信仰を告白すること」①（信仰の真理の告白、感謝あるいは賛美の告白、罪の告白） 第11回 「信仰を告白すること」②（個人としての告白と共同体としての告白） 第12回 「信仰を告白すること」③（共同体としての信仰の告白と聖書における告白の規範的モデル） 第13回 「信仰告白の内容」①（イエス・キリストを告白する、古代との連続性） 第14回 「信仰告白の内容」①（近現代の新しい信仰告白） 第15回 まとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 教会史Ⅰ～Ⅳの関連する事柄や史料をよく復習し、関連する史料に触れておくこと。		
<テキスト> 特になし。必要な史料は授業中に配布、または指示する。		
<参考書・参考資料等> ケリー『初期キリスト教信条史』（服部修訳、一麦出版社、2011年）		
<学生に対する評価（方法・基準）> 講義の出席を前提とし、①授業での議論のリード、②授業での発表、③期末の論文によって、共通評価指標：講義・演習に基づいて総合的に評価する。		
<課題に対するフィードバックの方法> 毎回の授業で質問を受け付け、レポートは採点后、コメントをつけて返却する。		

組織神学専攻・歴史神学関係	授業番号	DB200002
神学史特殊研究 b	本城 仰太	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件> 特になし	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> 教理としての信仰告白（テキストの第三章）を学ぶ。		
<到達目標> 聖書や二千年にわたる信条・信仰告白に関して、「教会の教え」、「教理の体系」、「諸教理と教理」、「教義としての教理」といった観点から整理し、論じることができるようになる。また、一次史料を原典で読み、最新研究を二次史料によって用いる力を養い、関連する教理を論じられるようになる。		
<授業の概要> 毎回のテーマに関連するレジュメと史料を配布しての講義、学生による発表（一人当たり2回）、ディスカッションを行う。		
<履修条件> 特になし		
<授業計画> 第1回 ガイダンス、テキストについて、信条と信仰告白の定義 第2回 信仰と教理の関係性 第3回 「教会の教え」①（教えることと教理） 第4回 「教会の教え」②（オリゲネスとアウグスティヌスの私的な意見と公の教理） 第5回 「教会の教え」③（信条・信仰告白における教理の優先性） 第6回 「教理の体系」①（信条・信仰告白におけるキリストの三重の職務） 第7回 「教理の体系」②（聖書の権威の下での信仰告白の体系化） 第8回 「教理の体系」③（信条・信仰告白における「健全」な教理） 第9回 「諸教理」と教理」①（単数形と複数形の使い分け） 第10回 「諸教理」と教理」②（信条・信仰告白における贖罪論の類型） 第11回 「諸教理」と教理」③（信条・信仰告白におけるマリア論、信仰義認論、天使論） 第12回 「諸教理」と教理」④（信者への教育） 第13回 「教義としての教理」①（教義 dogma の定義） 第14回 「教義としての教理」②（近現代において教理を告白すること） 第15回 まとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 教会史Ⅰ～Ⅳの関連する事柄や史料をよく復習し、関連する史料に触れておくこと。		
<テキスト> J. Pelikan, <i>Credo : Historical and Theological Guide to Creeds and Confessions of Faith in the Christian Tradition</i> , New Haven and London : Yale University Press, 2003 の第三章（Confession of the Faith as Doctrine） （初回の授業で訳を配布する）。その他必要な史料は授業中に配布、または指示する。		
<参考書・参考資料等> ケリー『初期キリスト教信条史』（服部修訳、一麦出版社、2011年）		
<学生に対する評価（方法・基準）> 講義の出席を前提とし、①授業での議論のリード、②授業での発表、③期末の論文によって、共通評価指標：講義・演習に基づいて総合的に評価する。		
<課題に対するフィードバックの方法> 毎回の授業で質問を受け付け、レポートは採点后、コメントをつけて返却する。		

組織神学専攻・実践神学関係	授業番号	DB300003
キリスト教教育特殊研究 a	朴 憲郁	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>特になし	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> 聖書神学の視点からの教育論		
<到達目標> キリスト教教育を基礎づける聖書的考察に習熟する		
<授業の概要> 最初に、キリスト教的人間形成論を概観する。その上で、福音書が描く教師イエス像と共同体形成、およびヘブライ書の<主のパイディア>概念を中心に、聖書の教育論の諸局面を学んでいく		
<履修条件> 特になし		
<授業計画>		
第1回 キリスト教的人間形成と教育（講義）－1）はじめに、「神の像」の形成、Christian Formation の意味、（480～482 頁）		
第2回 2）Christian Formation の聖書の根拠－第二コリント書3章18節の意味と今日的射程－、コメニウスの<神の像>の理解、伝統的<神の像>の復権（482～484 頁）		
第3回 3）「キリスト教的人間形成と教育」の教育実践－人格教育の問題（485～487 頁）		
第4回 4）キリスト教的人間形成－その担い手、キリスト教学校の働き（487～489 頁）		
第5回 対決を含むキリスト教的人間形成（講義）、（490～493 頁）		
第6回 公共的モラル形成力としてのキリスト教的人間形成（493～500 頁）		
第7回 教師イエスと共同体の形成－1）はじめに、福音書にみられる教師イエス（3～8 頁）		
第8回 教師イエスと共同体の形成－2）神学的考察、帰結（8～13 頁）		
第9回 教師イエスと共同体の形成－3）イエスの言葉伝承の継承にみられるパウロの教師理解（新たな視点、ラビ的伝承方法の摂取）（13～15 頁）		
第10回 教師イエスと共同体の形成－4）霊的教師、むすび（15～18 頁）		
第11回 イエス伝承と教会教育		
第12回 ヘブライ書12章4～11節の<主のパイディア>概念（29 頁～）－ 1）はじめに、N.T.における「教育」（パイディア）の概観		
第13回 2）釈義的考察		
第14回 3）宗教教育学的意義		
第15回 まとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 全員、事前にテキストの当該箇所を目を通してディスカッションできる備えをする。後期課程履修生は質問や意見を用意して、議論の活性化を目指す。履修者は何度かテキストを発表し、その後に相互討論する。		
<テキスト> 朴 憲郁 『現代キリスト教教育学研究－神学と教育の間で－』 日本キリスト教団出版局、2020年8月 テキストは学生各自が（著者から）購入		
<参考書・参考資料等> 授業の中で随時紹介する		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業時の発表、討論への参加度、および期末レポート（5,000字程度）によって評価する。 2/3以上の授業出席者を評価の対象とする。共通評価指標（1）の①～④の内容を重視する		
<課題に対するフィードバックの方法> 提出されたレポートにコメントを付して返却する		

組織神学専攻・実践神学関係	授業番号	DB300004
キリスト教教育特殊研究 b	朴 憲郁	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> 神学的諸分野におけるキリスト教教育学の展開		
<到達目標> 現代のキリスト教教育学の重要な諸テーマを神学的に把握する		
<授業の概要> シュライエルマッハーの宗教教育思想を初め、創造論における自然神学の再考、宗教と生活史、宗教改革者ルターによる教育的意義を確認する		
<履修条件> 特になし		
<授業計画> 第1回 ルターとの対比におけるシュライエルマッハーの宗教教育の根本思想（149～165頁）、1）近代の発端としての人格的な宗教と教育（149～153頁） 第2回 2）宗教論と信仰論、ルターとシュライエルマッハーとの神学的相違（153～156頁） 第3回 3）宗教改革的基盤に立つ信仰と教育（156～157頁） 第4回 4）ルターのカテキズム教育（157～159頁） 第5回 5）経験としての啓示、むすび（159～165頁） 第6回 創造論における自然神学の再考－「媒介」概念の厳密化（166～169頁） 第7回 自然神学問題の新たな定式化（169～174頁） 第8回 宗教教育学の結論 1）経験における神言述（174～180頁） 第9回 宗教教育学の結論 2）聖書的・キリスト教的隠喩と象徴の解釈による神学的人間論（180～182頁） 第10回 宗教教育学の結論 3）経験と現実に関連づけた神言述、むすび（182～190頁） 第11回 歴史の中に働く神（個人史的視点から）－1）歴史と神の歴史（191～196頁） 第12回 宗教と生活史（196～205頁） 第13回 ルターにおける教会とこの世への責任的地平－1）宗教改革の教育的意義と人間理解（206～213頁） 第14回 2）教会とこの世への責任的地平－ルターの二統治説を巡る論争、その他（213～218頁） 第15回 2）教会とこの世への責任的地平－敬虔と教育、その他（218～227頁）		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 全員、事前にテキストの当該箇所を目を通してディスカッションできる備えをする。後期課程履修生は質問や意見を用意して、議論の活性化を目指す。履修者は何度かテキストを発表し、その後相互討論する。		
<テキスト> 朴 憲郁 『現代キリスト教教育学研究－神学と教育の間で－』 日本キリスト教団出版局、2020年8月 テキストは学生各自が（著者から）購入		
<参考書・参考資料等> 授業の中で随時紹介する		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業時の発表、討論への参加度、および期末レポート（5,000字程度）によって評価する。 2/3以上の授業出席者を評価の対象とする。共通評価指標（1）の①～④の内容を重視する		
<課題に対するフィードバックの方法> 提出されたレポートにコメントを付して返却する		

聖書神学専攻	授業番号	DC100001
博士論文指導演習聖書神学 a	各指導教授	<担当形態>
前期・0単位	<登録条件> 博士論文指導演習聖書神学 b と通年で登録すること。	
<学位授与方針との関係> [DP2] 高等教育機関において研究者・教育者として継続的に研究業績を出すことのできる能力を身に付ける		
<授業のテーマ> 学生各自の研究課題に従い、文献の講読や討論などを通じて博士論文を作成する。		
<到達目標> 世界的レベルの聖書学論文が書けるようになる。		
<授業の概要> 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。		
<履修条件> 博士課程後期課程に在学する聖書神学専攻者。		
<授業計画> 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。		
<準備学習等の指示>		
<テキスト>		
<参考書・参考資料等>		
<学生に対する評価（方法・基準）>		
<課題に対するフィードバックの方法>		

聖書神学専攻	授業番号	DC100002
博士論文指導演習聖書神学 b	各指導教授	<担当形態>
後期・0単位	<登録条件> 博士論文指導演習聖書神学 a と通年で登録すること。	
<学位授与方針との関係> [DP2] 高等教育機関において研究者・教育者として継続的に研究業績を出すことのできる能力を身に付ける		
<授業のテーマ> 学生各自の研究課題に従い、文献の講読や討論などを通じて博士論文を作成する。		
<到達目標> 世界的レベルの聖書学論文が書けるようになる。		
<授業の概要> 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。		
<履修条件> 博士課程後期課程に在学する聖書神学専攻者。		
<授業計画> 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。		
<準備学習等の指示>		
<テキスト>		
<参考書・参考資料等>		
<学生に対する評価（方法・基準）>		
<課題に対するフィードバックの方法>		

組織神学専攻	授業番号	DC200001
博士論文指導演習組織神学 a	各指導教授	<担当形態>
前期・0単位	<登録条件> 博士論文指導演習組織神学 b と通年で登録すること。	
<学位授与方針との関係> [DP2] 高等教育機関において研究者・教育者として継続的に研究業績を出すことのできる能力を身に付ける		
<授業のテーマ> 学生各自の研究課題に従い、博士論文のテーマを設定し、研究を深め、論文を執筆する。		
<到達目標> 第一次文献の読解や第二次文献との対論などを通して、具体的に博士論文の部分的作成に寄与する。		
<授業の概要> 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容・表現などについて指導教授と対話しつつ、実際に博士論文の作成にあたる。		
<履修条件> 博士課程後期課程に在学する組織神学専攻者。		
<授業計画> 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。		
<準備学習等の指示> 小まめに指導教授と面談し、アドヴァイスを受けるようにする。		
<テキスト> 面談の中で指示する。		
<参考書・参考資料等> 面談の中で指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 博士論文の共通評価指標に従う。		
<課題に対するフィードバックの方法> 適宜指導する。		

組織神学専攻	授業番号	DC200002
博士論文指導演習組織神学 b	各指導教授	<担当形態>
後期・0単位	<登録条件> 博士論文指導演習組織神学 a と通年で登録すること。	
<学位授与方針との関係> [DP2] 高等教育機関において研究者・教育者として継続的に研究業績を出すことのできる能力を身に付ける		
<授業のテーマ> 設定したテーマのもとで、さらに研究を深め、論文を執筆する。		
<到達目標> 第一次文献の読解や第二次文献との対論などを通して、具体的に博士論文の部分的作成に寄与する。		
<授業の概要> 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容・表現などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。		
<履修条件> 博士課程後期課程に在学する組織神学専攻者。		
<授業計画> 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。		
<準備学習等の指示> 小まめに指導教授と面談し、アドヴァイスを受けるようにする。		
<テキスト> 面談の中で指示する。		
<参考書・参考資料等> 面談の中で指示する。博士論文の共通評価指標に従う。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 博士論文の共通評価指標に従う。		
<課題に対するフィードバックの方法> 適宜指導する。		